

高校生・大学生の社会貢献

近年の若者を取り巻く状況と、そこから発生する様々な問題を受け、今、教育現場では、学校・家庭・地域が連携して、青少年の体験活動を推進していくための取組が進められています。

特に、高校生や大学生については、ボランティア活動等を通して、多くの人と接する中で自身を高めていくとともに、地域貢献のための活動に進んで取り組むことで、社会への参画意識を高めていくことが求められています。

今回の特集では、様々な形で自ら進んで社会貢献に取り組む「頑張っている」高校生・大学生と、それを支える人たちの仕組みづくりについて御紹介します。

大学生が、地域の人と一緒に母さんをサポート「35(産後)サポネットin荒川」

荒川区では、「35サポネットin荒川」という事業が実施されています。これは、産後6か月までの赤ちゃんがいる家庭へのサポートで、この活動に首都大学東京荒川キャンパス(以下「首都大学」という。)の健康福祉学部の学生が参加しています。地域のボランティアと一緒にサポートが必要な家庭へ訪問し、家事や育児の支援活動などを行っています。

活動に参加している看護学科2年の岩崎ひとみさん、森郁美さん、秋葉由貴さんにお話を伺いました。



岩崎さん

『小さい子とかかわることが好きなんです。』

◎この活動に参加するようになったきっかけは?

「大学の授業で、この活動のことを知りました。そして、学園祭のときに実際に活動している様子を見て、参加したいと思いついた活動を始めました。ボランティアには、以前から興味はありましたが、小さい子とかかわることも好きでした。その中でも赤ちゃんとは、小中学生とは違い、なかなかかわることができないので、ぜひやってみようと思いました。」

『母親の苦労が、よく分かりました。』

◎実際に活動してみて、大変だったことは?

「赤ちゃんは、かわいいだけではない、ということを実感しました。育てているお母さんの苦労がよくわかりました。たった3kgなのに、抱いていると腕は痛くなるし、一度泣き出したら、なかなか泣き止んでくれません。食事のときも、離乳食を食べてくれなくて、すごく苦労しました。最初は、赤ちゃんを抱くことで精一杯で、お母さんと話をするのもできませんでした。慣れてきて余裕ができると、お母さんの話を聞くこともできるようになりました。また、自分が赤ちゃんのときには、母親も苦労したんだな、ということがよくわかりました。」

『ありがとう、の一言がうれしかったです。』

◎活動して、うれしかったことや感動したことは?

「自分では、何もできなかったと感じていたときもあったのですが、お母さんから『ありがとう』と言われたときがうれしかったです。自分の役割が果たせた、という達成感を感じました。赤ちゃんもすくなくついてくれて、抱いていた赤ちゃんをお母さんに渡すときに、逆に自分から離れたくなくて赤ちゃんが泣いてしまったこともありましたが、また、同じ家庭で活動して、赤ちゃんが成長していく姿を見ることができたのがうれしかったです。」

その後、1歳になった赤ちゃんを、お母さんが学園祭に連れてきてくれて、再会したときには、また成長した姿を目にして感動しました。」



森さん

『さらに、輪を広げていきたいです。』

◎これからどんな活動をしていきたいですか?

「この活動に参加して半年が経ちましたが、活動の輪がどんどん広がっていると感じています。町を歩いていて、会うと声をかけてくれるお母さんや地域の人もいて、とてもうれしく思います。自分も地域の一員なんだと感じます。これからも、より多くの人に知ってもらい、さらに輪が広がってほしいと思います。私たちも、もっといろんな家庭に行きたいし、いろんな人と会える機会を増やしたいです。」



秋葉さん

地域に根付いたシステムづくり

えみす 恵美須文枝 教授



この事業は、首都大学東京健康福祉学部の教授で、助産師でもある恵美須文枝先生の発案で、首都大学とNPO法人「じゃがいも共同保育所」「荒川区社会福祉協議会」「荒川区子育て支援部」が連携して実施しています。民生児童委員や地域在住の方、健康福祉学部の学生がボランティアで活動しています。このように、様々な団体・組織が横の連携を深め、また地域の方や学生がボランティアで参加することで、地域に根付いた活動となっているのが、この事業の特色です。

* 35サポネットin荒川

この地域に在住し産後6か月までの子どもを子育て中の家庭に、地域の子育て経験者や首都大学の学生・教員がボランティアで伺い、お手伝いをするシステム。週1~2回訪問し、2時間程度、買い物や家事の手伝い、外出の付き添い他、保護者の相談に応じて様々な活動を行う。利用料は1回500円。

参加している大学生の中には、将来は看護師や保健師を目指している人もいます。そのような学生にとっては、大学で学んだことを生かせるとともに、様々な体験ができる有意義な場でもあります。月1回の月例会では、活動状況の報告や研修会を実施し、メンバーの共通理解を図るとともに、ボランティア同志の交流も行っています。

また、この1月には、一層の決め細やかな支援を目指して、「実家プロジェクト」を立ち上げました。町屋駅の近くに一軒家を借りて、ボランティア活動の拠点にするとともに、だれでも気軽に立ち寄ることができるようにすることで活動を広げることがねらいです。この4月からは、子育て等の悩み相談も始めます。今後の取組のますますの広がりが期待されています。